



# ブエノスの女

【七】

津川稔

萩田氏はもう来れさうなものだと……、二時を過ぎた時計を何度も見ながら、山崎の心は段々といら／＼よし、セニヨラ、ロシタ、多分ボイが大聲で船客を捜しながら、送人やチーフ、やりや、そして、肩から吊つた籠に果物やキヤンデーを入れた娘子で大變な雑沓である。

「大變な見送りだね」通りすがりに、一等運転上が肩を叩いて船橋のぎわめきにまじって聞えて来る。ソアに腰を下して煙草を取り出すと、「コッコッコ」とドアを叩く者がある。

「はい」といつて立上ると同時に、荻田氏が入つて立たつた。でも彼は、はつと自分で取戻すと、其處にじつとしてゐられない焦そうに駆られ船室に歸つて行った。

通路一つおいた喫煙室からは、軽快な圓舞曲のレコードが船客のぎわめきにまじって聞えて来る。ソアに腰を下して煙草を取り出すと、「コッコッコ」とドアを叩く者がある。

「もう少し早目に来る都合だつたんだが、大變なことになりまして」

「それが……」

荻田氏はぐんと唾を呑み込むと、大きな呼吸を一つしてつゝけるのだった。「お書を終つて朝の中貴方に上げようと思つて朝の中羅が鳴り響いて來た。今までし

てのところへ、アパートの管理人から電話が掛かつて來ました。大急ぎで行つて見ますと、息詰るような恰好あといひよどんで荻田氏に、彼女のようないふものですか」

「お書なんかしたのかい」と山崎は急き込むのだった。

「え？」

「たつた一發、ピストルです」

「眞實か」

「嘘なんかいふのですか」

「でも俺には信じられない、今朝

方元氣でタクシーまで送つてくれたセルダが」

「彼女も、山崎ははつと思ひ出するものがあつた。分け合つてやるにしのこつて思つてあげるはずの花束はセ

ルダの枕元に置いて來ました。今丁度警察やエンゼリンの連中なども集まつて來ましたが、四

何れケープからでも手紙出す」

# 運動會

御寄附芳名

【署敬稱】

十鶴宛 鐘ヶ瀬勸業會社、齊藤

彦藏、服部雄、富崎數馬、山

中川長作、無名氏、▲

澤會長、小學校紅白勝盃

團体八百リレー勝盃

元兄弟、西坂貴太、佐藤平三郎

軍武官、二百米決勝盃

中村商

右御後援に對し深謝致します

機に凭り掛かつたまゝ手にした

彼女の手紙を握り締めるのだつた。

ガラン／＼ガラン／＼と二回目の銅鑼が響いて來て、あた

りはまた一しきり騒々しくなつた。

「さや、これで失禮します」

「さうかい、済まなかつたな」

「後のことは詳しく述べ紙差上げます」

「さや、九月には是非お出でにな

ります、九月には是非お出でにな

ります」

「ざや、これで失禮します」

「さうかい、済まなかつたな」

「後のことは詳しく述べ紙差上げます」

「ざや、これで失禮します」



